

## A62a 小規模天文台の役割と可能性

田辺健茲 (岡山理科大・総合情報)

近年の CCD ならびに PC の高性能化、分光器の小型軽量化、および市販の小口径望遠鏡と架台の性能向上、さらには秀れた天文データ解析ソフトの登場により、個人や大学研究室などの所有する小規模天文台の果たすことのできる観測的研究の範囲は飛躍的に広がってきた。かつては 1m を超える望遠鏡を用いなければできなかった観測が、30cm 以下の口径でも可能になっている。実際、我々の研究室の天文台では口径 28cm の望遠鏡に分光器を取り付けて、1980 年代には OAO の 188cm でのみ行えた Seyfert 銀河などの活動天体の分光観測に成功している。

この講演では、このような現状を踏まえ、(1) 新天体の検出、(2) 活動天体の測光観測

(3) 活動天体の分光観測といった面から小規模天文台が現在行っていること、ならびに将来への展望や可能性について具体的に分析する。このうち特に (1) 新天体の検出は、

小規模天文台が得意とする観測であり、これまでアマチュア観測家の活躍の舞台であった。今回我々は (1) と (2) を組み合わせた方式を採用することで、より良質の天文データ取得

に向けた試みについても述べる。